

JICA の参加型プロジェクトを住民は どのように認識しているのか

——PRODEFI を題材とした民衆演劇を事例として——

森 英 麻

1. は じ め に

本稿では、日本の開発援助プロジェクトを題材とした民衆演劇を紹介するとともに、劇の内容を分析し、住民側からみた日本の援助の考察を試みることを目的とする。なお、民衆演劇とは、民衆自身による演劇であり、キューバ革命後に民衆演劇が運動へと発展したラテンアメリカでは次のように定義されている。[柿沼 (1983)]

- 民衆が抱えている問題にそくして、民衆に属する人々ないしは文化活動家の手で創り出されたテキストとその上演
- 民衆の言語の使用
- 民衆の利益を擁護するテーマの設定
- 民衆が手軽に見ることのできる料金で、民衆の生活する土地において行われる公演

開発途上国において多くの援助プロジェクトが実施されているものの、プロジェクト側が住民側の認識を十分把握していないとの批判がある。チェンバースは、「貧しい地域住民の価値観、好み、基準は、非常に多く、多様で変化に富んでおり、専門家が考えるものとは往々にして異なっている。」と指摘している [チェンバース (2000) p. 376]。住民が意を決して声を上げるようなケースでない限り、住民の認識が明確な形をとってあらわれることは稀である。そして仮に声を上げる人々が現れたとしても、かれらの声が地域全体を代表しているとも限らないのである。また、佐藤は、援助が一部の住民に対する「えこひいき」と受け止められ、プロジェクトの実施に障害となるケースを挙げ、「問題は、ドナーの論理と受け手の論理は異なっていることが多く、ドナーにとって公正なことが、受け手にとっては公正ではないということがありうる、という点なのだ」と指摘している [佐藤 (2005) p. 216]。これらの議論に共通するのは、住民の視点や認識はプロジェクト側が推測するほど一様ではなく、また推測しているものと異なる場合が多いという認識である。

本稿で分析する民衆演劇は、セネガル総合村落林業開発計画 (Projet Communautaire de Développement Forestier Intégré au Sénégal : 以下、PRODEFI) に関するものである。PRODEFI のプロジェクト概要等の詳細については後に詳しく述べるため、ここでは住民の認識につ

いての同プロジェクトの評価がどのようなものであるかという点について言及しておきたい。

PRODEFI は2008年3月に終了したプロジェクトであり、その際にファイナルレポートが作成された。同レポート計53ページのうち、評価に関して書かれている第四章（プロジェクトの実施するモニタリングと持続性の評価）には27ページが割かれている。第二章（プロジェクトの概要）の実施方針では、「持続性の確保」に焦点を合わせた評価を実施すると定められており、プロジェクトが目指す「自然資源管理活動の持続性」と「モデルの持続性」を適時、検証しながら進めていくと書かれている [PRODEFI 延長フェーズ ファイナルレポート (2008)]。第四章のプロジェクト評価は、大半がプロジェクトの効果の定量分析である。注目すべきは、「4.4.4.住民に対する PRODEFI の知名度、満足度」である。その冒頭には、「ここでは、対象村住民がどのようにプロジェクトを捉え、評価しているかを定量的調査の結果に基づきまとめる。」とあるが、(1) PRODEFI の知名度、(2) PRODEFI への満足度という2項目が設けられているだけであり、アンケート調査の結果がわずか2ページ弱にまとめられている。内容は、PRODEFI のことを知っているか否か、PRODEFI に満足しているか否か及びその理由についての記述に限定されている。これだけでは対象村住民がどのようにプロジェクトを捉えているのか、どのように評価しているのかを読みとることは不可能である。

本稿で採り上げる民衆演劇はプロジェクトに大に関わりのあるテーマであるにもかかわらず、プロジェクト側と全く関係のないところで始まったものであり、極めて貴重な事例であると言える。前述のとおり、民衆演劇は民衆の手で創られるものである。今回採り上げる劇のストーリーや台詞は全て住民たちが考えたものである。住民たちの狙いは、教育であり娯楽であるため、喜劇の側面も持ち合わせている。そのため、極端な設定やストーリー展開は演劇を盛り上げるため随所に見受けられる。しかしながら、少なからず住民の認識が反映されていると考えられ、本稿で分析するに値するであろう。

2. 調査方法と社会的背景

1. 実態調査の方法

PRODEFI が実施している植林研修を題材として、住民たちが創作し、プロジェクトの対象村及び非対象村にて上演した劇を分析する。

劇が上演された背景を把握するために、聞き取り調査を実施した。民衆演劇についての聞き取り調査を2006年12月4日および18日にクール・セトゥ・ジャフー村にて行った。対象者はYoussoufa Ndao 氏（劇団のリーダー）、El Hadji Aliou Ndiaye 氏（劇団の副リーダー）である。劇団に対して資金援助を行っている Eco-Education のファシリテーターであり Nioro 周辺の活動のまとめ役である Aissatou Niang 氏への聞き取りを2006年12月18日に行った。PRODEFI アニメーター¹⁾の Adama Diallo 氏、Djibril Keita 氏、Bassirou Ngom 氏の協力を得て村々の情報

1) 地域ごとに担当を持つ啓蒙普及員のこと。対象村と PRODEFI の架け橋となる存在。

を入手するとともに、2006年12月22日にはクール・バプー・ンゴネ村にて住民に対して聞き取りを行った。クール・バプー・ンゴネ村をインタビュー対象村として選定した理由は、今回の民衆演劇の巡演で植林がテーマの劇が上演された村のうち、唯一の PRODEFI 非対象村であることに起因する。PRODEFI 非対象村を選んだのは、PRODEFI 研修とこれまで無縁であった村の住民たちへの民衆演劇のインパクトを調査するためである。

他方、民衆演劇の内容の分析は、2006年12月2日にクール・セトゥ・ジャフー村にて上演されたものをもとに行った。観劇の際に上演の様子を観察するとともに、その際に撮影した民衆演劇の映像をもとに台詞起こしを行った。PRODEFI 通訳の Emmanuel Sanga 氏がウォロフ語の台詞を起こし、それをフランス語に翻訳した。その後、筆者が日本語に翻訳した。

2. PRODEFI について

PRODEFI は JICA²⁾ の技術協力プロジェクトであり、表1のとおり2つのフェーズに分けて実施された。今回採り上げる民衆演劇は、延長フェーズにあたる2006年の出来事である。

表1 PRODEFI 概要

区 分	第1フェーズ (PRODEFI I)	延長フェーズ (PRODEFI II)
実施期間	5年間 (2000年1月～2005年1月)	3年間 (2005年4月～2008年3月)
プロジェクトの目標	天然資源管理活動普及モデルの構築	天然資源管理活動普及モデルの確立・普及
	《PRODEFI モデルの考案》	《PRODEFI モデルの実践・普及》
対象地域・規模	カオラック州ニョーロ県9村 ファティック州ファティック県3村 ダカール州ルフィスク県6村	カオラック州ニョーロ県30村 (人口10,583人)
プロジェクト事務所	ダカール市 (首都)	ニョーロ市 (首都から 244 km)

(出所) PRODEFI モデルユーザーズマニュアル (2008.3) より引用

第1フェーズではセネガルの首都ダカールにおいていたプロジェクト事務所をニョーロに移し、対象地区も事務所周辺に限定したことによりプロジェクトの中身が大きく変化したと言える。表1のとおり、第一フェーズ、延長フェーズともに PRODEFI モデルに注力していることがわかる。PRODEFI モデルとは、「総合的な住民参加型村落開発アプローチ。投入は研修のみ。機材・資金の提供やインフラ整備は約束しない。」[PRODEFI モデルユーザーズマニュアル (2008)] というものである。PRODEFI が唯一投入するという研修の特徴は、「参加者を選択せず、地域の資源を最大限に活用し、村で、住民のニーズを尊重し、多くが参加する研修」[PRODEFI 延長フェーズ プログレスレポート(1) (2005)] という点にある。従来型の研修は村から数人選抜されて代表として村から離れた研修施設等へ研修を受けに行くというのが大半であったため、村内に研修で学んだ技術が普及するケースが少なかった。PRODEFI においては誰でも研修にアクセスすることができ、それによって村内に研修で学んだ知識が拡がる可能性が

2) 独立行政法人国際協力機構

高くなるというものである。

外務省ホームページ³⁾によれば、今後セネガル周辺国においても砂漠化対策の一環として PRODEFI モデルを実施する予定であると発表されている。また、PRODEFI モデルはすでに別地域で取り入れられており、環境分野での日本の国際協力において期待の大きいものであると言えよう。PRODEFI 研修には野菜栽培や家畜肥育など12テーマほどあり、対象村ごとに住民のニーズに合わせて実施する研修を決定する。民衆演劇で採り上げられた植林も PRODEFI 研修のテーマのひとつとして実施してきたものであり、植林の効用や植林方法、苗木の生産などの知識や技術の提供を行う。

PRODEFI については情報の開示が進んでおり、インターネット上でいくつかのレポートが閲覧できダウンロードもできるため、詳細はそちらをぜひ参照いただきたい。

3. PRODEFI 対象村の住民による民衆演劇

1. 住民組織「グイギ」

PRODEFI 対象村のひとつであるクール・セトゥ・ジャフー村のスポーツ・文化振興青年組織（Association Sportive et Culturelle, 以下 ASC という）が今回の民衆演劇を行っている。クール・セトゥ・ジャフー村には“Gouy Gui”（以下、グイギ）という名称の ASC が存在する。グイギとはウォロフ語で「バオバブ」を意味している。代表は Youssoufa Ndao 氏である。所属人数は全体で95人（男性40人、女性45人）である。主な活動は、サッカーなどのスポーツ活動や農業ボランティアである。グイギへの参加資格は特に無く、誰でも参加可能である。現在のグイギ所属者は全員クール・セトゥ・ジャフー村在住者である。

1.1. 民衆演劇団“ボッキエーテ”

グイギの活動の1つとして民衆演劇がある。周辺村を巡回していくつかのテーマの寸劇を無料で上演している。前述のとおりグイギには95人の所属者がいるが、そのうちの一部の所属者で劇団を組織している。この民衆演劇団の代表はグイギ同様、Youssoufa Ndao 氏であり、“Bokkyeete”（以下、ボッキエーテ）という劇団名がついている。ボッキエーテとはウォロフ語で「関心を高める集団」を意味している。劇を通して村人に様々な知識をつけてもらうことを目的としているため、この名称をつけたという。ボッキエーテは2005年4月頃に結成され、今年で2度目の巡回である。劇団員は全体で11人（男性5人、女性6人）である。これまでに誰も演劇を学んだ経験はない。また、これまでのところ台本も存在していないが、今後は作る予定があるという。

表2はこれまでに行われた上演テーマである。2005年度の上演テーマは4テーマであったが、2006年度は6テーマに増え、PRODEFI 研修の植林も加わった。ちなみに、このような劇団は

3) 外務省ホームページ（2008年12月7日アクセス）http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/senegal/sect03_01_0501.html

表2 ボッキエーテの民衆演劇テーマ一覧

2005年度				2006年度			
教		育		教		育	
早		婚		早		婚	
エ	イ	ズ		エ	イ	ズ	
マ	ラ	リ	ア	マ	ラ	リ	ア
				農	民	税	
				植		林	

(出所) ヒアリングにより筆者作成

周辺村には存在しておらず、このボッキエーテのみである。しかし、PRODEFI 対象村であるブリボキ村、クール・ジャータ村、マンカ・クンダ村でもこのような民衆演劇に取り組みたいという若者たちが名乗りを上げているという。

1.2. Eco-Education の支援

ボッキエーテの活動支援を Eco-Education が行っている。Eco-Education とは、落花生盆地プログラム (PBA: Programme Bassin Arachidier) の中で立ち上げられた2年間の識字教育パイロットプログラムであり、ドイツ技術協力公社 (GTZ: Gesellschaft für Technische Zusammenarbeit) が出資しているものである。Communauté rurale de Prokhane (プロハン地区村落共同体: 以下, CR) と協働⁴⁾ し、現地の講師で識字教育を行うという特徴を持っており、2007年9月でパイロットプログラムは終了予定である。CR および Eco-Education はボッキエーテに対して大きな影響力を持っている。ボッキエーテの民衆演劇の活動に対して40万フランセーファ (約8万円) 出資している。また、上演村およびテーマの選定も CR および Eco-Education が行っている。

2. 民衆演劇の上演について

2.1. 上演村とテーマの選定

ボッキエーテがこれまでに民衆演劇を上演した村は表3および表4のとおりである。2005年度の上演スケジュールは誰も覚えておらず、把握することができなかった。上演村の選定においては、2006年度の上演は、2005年度とは異なる村であることを選定基準にしている。これは、前述の通り、ボッキエーテが多くの人々に知識を広める活動を目指していることに由来する。2005年度は6カ村、2006年度は8カ村で上演した。例外として、二年連続で上演した村が2つある。ひとつはボッキエーテの本拠地であるクール・セトゥ・ジャフー村であり、もうひとつはクール・タンバ村である。当初は2006年度にクール・タンバ村ではなく、クール・ジャータ村にて上演予定であったが、クール・ジャータ村で葬儀があったため急遽クール・タンバ村に変更したということである。

上演村において PRODEFI 非対象村は2005年度では2カ村、2006年度では3カ村であった。上

4) 厳密には Eco-Education が CR に出資し、CR が講師を選定し雇用している。

表3 民衆演劇の上演村および上演テーマ（2005年度）

2005年度		
村名（ローマ字表記）	村名（カタカナ表記）	上演テーマ
Sotokoye	ソトコイ	教育, 早婚, エイズ
Keur Tamba	クール・タンバ	早婚, マラリア, エイズ
Keur Sette Diakhou	クール・セットゥ・ジャフー	早婚, マラリア, エイズ
Keur Layine Guéye	クール・ライエン・ゲイ★	教育, 早婚, エイズ
Keur Samboye	クール・サンボイ★	早婚, マラリア, エイズ
Keur Alssane Khodia	クール・アラサン・ホッジャ	教育, マラリア

(注) ★印は PRODEFI 非対象村

(出所) ヒアリングにより筆者作成

表4 民衆演劇の上演村および上演テーマ（2006年度）

2006年度			
上演日	村名（ローマ字表記）	村名（カタカナ表記）	上演テーマ
11/10	Keur Tamba	クール・タンバ	早婚, エイズ
11/13	Youna	ヨーナ★	早婚, 農民税, エイズ
11/17	Daga Albouri	ダガ・アルブーリ	植林, 早婚, エイズ
11/19	Keur Babou Diop	クール・バブー・ジョップ	早婚, 農民税, マラリア
11/20	Mbappe	ンバップ	エイズ, 早婚, 農民税
11/22	Ndienguène	ンジョングエン★	早婚, 農民税, エイズ
11/23	Keur Babou Ngoné	クール・バブー・ンゴネ★	教育, 植林, マラリア
12/2	Keur Sette Diakhou	クール・セットゥ・ジャフー	植林, 早婚

(注) ★印は PRODEFI 非対象村

(出所) ヒアリングにより筆者作成

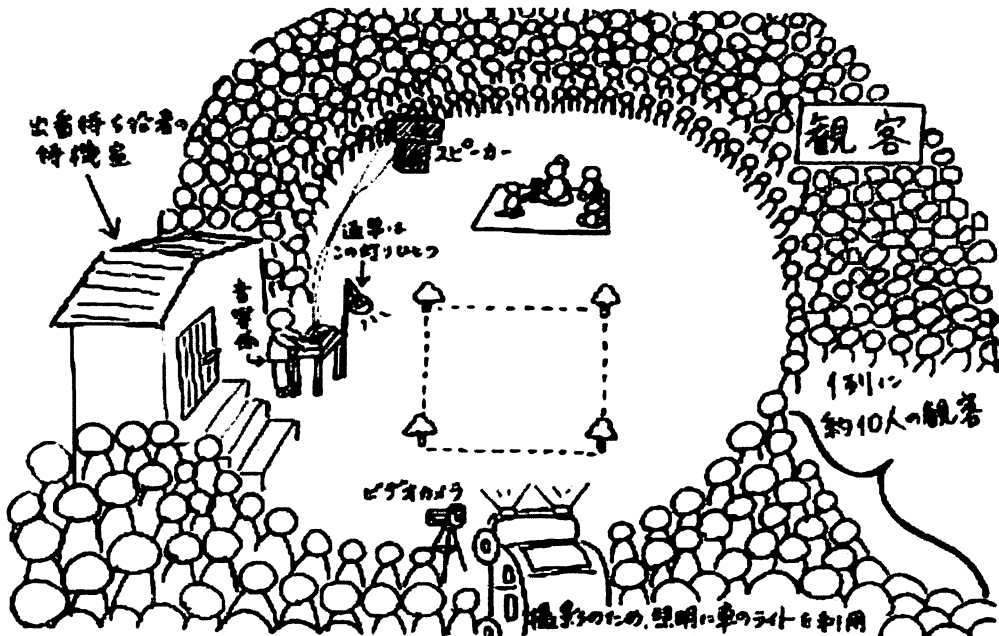
演村およびテーマの選定は、前述のとおり Eco-Education および CR が行っている。村人にどのようなテーマが良いか尋ねた上で、その村にとって必要であると考えられるテーマを選定しているという。たとえば、クール・タンバ村ではプル族が多く住んでおり、プル族には早婚が頻繁にみられるため早婚をテーマにした劇を上演し、ガンビアとの国境近くの村ではエイズをテーマにした劇を上演するというような選定基準であるという。

2.2. 民衆演劇の様子

筆者は2006年11月17日のダガ・アルブーリ村および12月2日のクール・セットゥ・ジャフー村での上演を鑑賞した。図1のイラストはクール・セットゥ・ジャフー村での上演の様子を筆者が描写したものである。場所は村内の中央広場であり、イラストには描かれていないが、すぐ右手には村の中心に位置するモスクがある。観客が輪を作り、その中心が舞台という設定である。舞台は主に2パートに別れており、ゴザを敷いて家族で会話するパートと植林をするパートであった。観客は、最前列および二列目は主に椅子に座った女性であり、その足元に子供が座り込んでいる。三列目以降は立見であるが、約8列目まで人の輪ができていた。クールセッジャフー村の全人口は896人であるが、村の住民の大半にあたる人々が集まったと言われている。また、他の村からも観にきていたということであった。

クール・セトゥ・ジャフー村での上演ではビデオ撮影に照明が必要であったため、車のライトで舞台を照らした。しかし、通常の上演では電球がひとつだけである。ダガ・アルブーリ村での上演の際も例外ではなく、村に街灯などもないため、電球ひとつでは役者の細かい動きはよく見えなかった。音響係が一名おり、マイクの調節をしたり、寸劇と寸劇の間に音楽を流したりしている。この音響係はボッキエーテの団員ではない。舞台袖の役割をしているイラスト左端の小屋は、通常は村の保健施設である。ダガ・アルブーリ村もクール・セトゥ・ジャフー村もともに20時開演予定であったが、ダガ・アルブーリ村では21時過ぎに始まり、午前0時過ぎ終了、クール・セトゥ・ジャフー村では20時30分過ぎ開演、23時30分頃終演であった。11月19日のクール・バプー・ジョップ村で観劇した Aissatou Niang 氏によると、当日は21時頃に開演、午前0時には民衆演劇は終了したものの、村人たちが喜びのあまり踊りだし、お祭り騒ぎは午前5時過ぎまで続いたという。

図1 クール・セトゥ・ジャフー村における民衆演劇の様子



(出所) 筆者作成

4. PRODEFI をテーマにした民衆演劇

1. 植林がテーマの民衆演劇——クール・セトゥ・ジャフー村での上演をもとにして——

以下は、上演最終回にあたる12月2日のクール・セトゥ・ジャフー村での上演に基づいている。上演時間は約45分であり、台詞は全てウォロフ語であった。ボッキエーテが実際に上演する劇は、同じテーマであっても、台本がなくアドリブも多いため、細かい内容や上演時間が各回

異なっているようであった。よって今回紹介するのはクール・セトゥ・ジャフー村での内容であることを断っておきたい。

登場人物は表5のとおりである。森林官役の人物が司会進行役も演じていた。森林官は不法な木の伐採や炭焼きを取り締まっており、刑罰の権限を持っている人物である。登場する家族は二家族であり、どちらも両親と数人の子供という構成である。

表5 登場人物一覧

	名 前	位置づけ
木を切る家族	パ ビ ラ ン	父
	ンデイハディ	母
	マ リ ッ ク	息子
	ア ダ マ マ リ ー	娘 娘
木を植える家族	パブナイス	父
	ラマトゥライ	母
	マ ミ ー	娘
	ロ ハ ヤ マ ガ イ	娘 娘
森 林 官		

(出所) 筆者作成

木を植える家族の家長であるパブナイスという名前はウォロフ語で「ハンサムな男性」を意味するという。劇の終盤で明らかになるが、彼はンジャイエ村という架空の村の村長であるという設定である。

ここで、この劇のあらすじを紹介したい。

あらすじ

バビラン（夫）とンデイハディ（妻）夫婦一家は、不法に木を切って生計を立てている。ギニアから木の売買人が買い付けにくるため、頻繁に森に木を切りに行ったり、炭焼きをしたりして、生活は安定していない。木を売って得られた現金によって、息子は美味しいチキン料理が食べられることを待ち望み、娘は綺麗な布地を買ってもらうことを楽しみにしている。一方、パブナイス（夫）とラマトゥライ（妻）夫婦一家は、植林に熱心な家族である。パブナイスは、なぜ木を植えなければならないか、植えることでどのようなメリットがあるのかなど妻や子供に語る。また、PRODEFIのおかげで植林の方法も知っているし、植林に必要な物も村に全て揃っているためすぐに開始することを提案する。そして、みんなで森に木を植えに行き、植林の方法を伝授する。時期は8月初旬の雨季で、皆忙しいため朝晩にパブナイス一家は力をあわせて植林をする。

しばらくして、ンジャイという買い付け人が森林官の紹介でパブナイスに会いに来る。パブナイスは70万フランセーファ（約14万円）で植林地を買い取る契約を交わし、パブナイス一家は大

喜びし、家を建てることを夢見る。そんな時、バビランが伐採するところを目撃したバブナイスは激怒し、バビランを森林官に告発する。不法に木を切っていたバビランには森林官から刑罰が科せられる。当初、禁錮3ヶ月と60万フランセーファ（約12万円）の罰金が科せられようとしていたが、怒りの収まらないバブナイスは森林官に個人的に話をし、禁錮7ヶ月を打診する。バビランは反省する様子もなく、減刑を要請する。その後、森林官がこれまでの伐採について訊ねると、バビランは7年前から不法に伐採し、これまでに73個の炭焼きの窯を作り、120本もの木を切ってきたことを告白する。木の大切さを森林官が話すとバビランは心を入れ替え、今後は植林の活動をすることを約束する。結局、禁錮1ヶ月と30万フランセーファ（約6万円）の罰金が科せられる。この30万フランセーファはバブナイスと森林官で半分ずつ山分けされることになる。この一部始終を見ていたバビランの息子・マリックは家に帰って家族にバビランが刑務所に入れられたことを話す。妻や子供はバブナイスが自分たち一家に対する嫌がらせであると受け止めるとともに、自分たちのこれからの生活を案じる。バビランが戻ってきてから事態は一変する。バビランは、これまでの不安定な生活を断ち切る決意を家族に打ち明ける。植林を始めると言い出した父に家族は皆賛成し、それまで自立していなかった息子も植林の作業の後には町に仕事を探しに行くと言い出す。バビランの妻も納得し、「植林は転ばぬ先の杖ね」という妻の台詞で幕を閉じる。



木を切る家族の会話シーン

(出所) 2007年12月2日筆者撮影



バビランが捕らえられ、森林官が刑罰を科すシーン

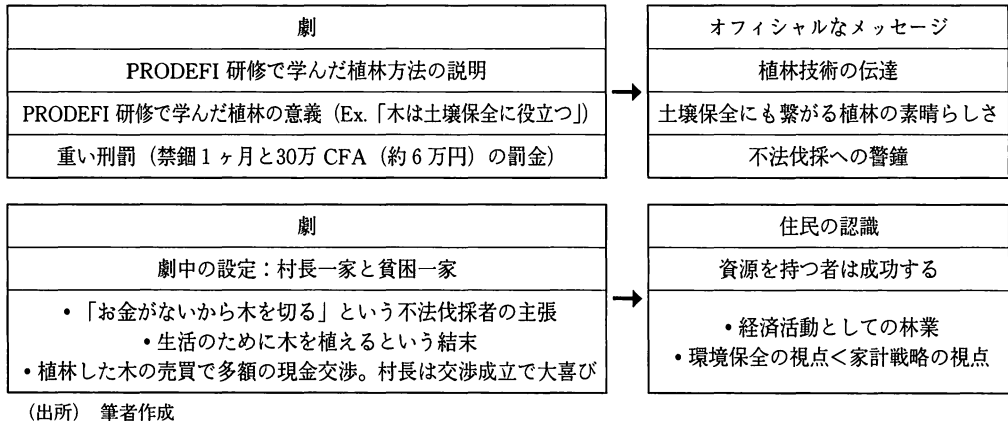
(出所) 2007年12月2日筆者撮影

2. この劇から読み取れるメッセージ

この劇を通じて観劇者へ伝えていられると考えられるメッセージは以下の図2のとおりである。オフィシャルなメッセージと考えられるものと、住民の認識と考えられるものに分類した。

まず、オフィシャルなメッセージとして3点挙げられよう。第一に、植林技術の伝達である。劇中では PRODEFI 研修で学んだ植林方法を詳細に説明するシーンがあり、木を植える家族のバブナイスが妻や娘に植林技術を説明しながら実践する。ユーカリの植え方や、マンゴーの木を植える際の溝掘りの方法など PRODEFI 研修で学んだ植林技術を忠実に再現している。後日、

図2 この劇から読み取れるメッセージ



PRODEFI 非対象村⁵⁾で観劇者を対象にヒアリング調査を行ったところ、観劇して植林方法がよくわかったので、植林を開始する予定であることが判明した⁶⁾。特筆すべきは、この劇を作った村人たちが PRODEFI に対して誤解している点があることが明らかになったことである。以下は、木を植える家族の会話である。

パブナイス：昨年よく苗木を取りに行っていたよなあ……何というところに行っていたんだっけ？ 名前を忘れてしまったなあ……うーん……

マガイ：森林局でしょ。

パブナイス：そのとおり！ 森林局だ。私も年を取ってきて物忘れが激しくなったなあ。そうだ、森林局だ。さて、新しい境遇で物事はガラッと変わったぞ。必要な資材のほとんどは村にある。必要な資材は私たちのすぐ近くにあるんだ。ここは苗畑への苗木のための種を準備するところだ。そして個人的に移植するんだ。これは誰のおかげだ？ 誰のおかげで簡単にこういうことができるようになったか知っているかい？

マガイ：森林局のおかげよ。

パブナイス：違う、これは PRODEFI のおかげだ。森林局の苗床に苗木を取りによく行っていたら。森林局が悪いと言ってるんじゃないぞ。PRODEFI のおかげでもっとやりやすくなったと言いたいんだ。だって今やほとんど全ての工程が村の中でできるんだ。村の苗畑に水遣りをして苗木を育てて、出来た苗木を持って植えに行く。PRODEFI のおかげで今ではこれが全てできるんだ。PRODEFI も森林局もどちらも良い組織だよ。でも、PRODEFI のほうが勝ってるね。

5) PRODEFI 非対象村で植林テーマの劇が唯一上演されたクール・バプー・ンゴネ村を指す

6) 観劇した住民へのヒアリング調査では、「今回の民衆演劇を見るまで PRODEFI について詳しいことを知らなかった」、「植林のやり方がよくわかったので2007年度から植林を始めることにした」、「すでに森林局に苗木の申請書類を提出した」という話を聞いた。

マガイ：うん、そう思うわ、お父さん。さて、日が暮れる前に行って直ぐに植え始めなきゃ。

これまでは森林局の苗床まで苗木を受け取りに行く手間があったが、PRODEFIのおかげで今では村に必要な道具は揃っており、苗木を育てる技術も教わったため、全ての工程が村で完結していると話している。そして、森林局よりも PRODEFI が勝っているとパブナイスは言っている。この会話からは、この劇を作った村人たちが、森林局と PRODEFI が別の組織であると受け止めていることが推測できる。実際は森林局をカウンターパートとして進めているプロジェクト⁷⁾であるにもかかわらず、村人の中にはそれを理解していない者もいるのであろう。

第二に、植林の素晴らしさの享受である。植林開始前にパブナイスが妻や娘たちに「木は早魃を防ぐ」や「土壌保全に役立つ」という植林の意義を語るシーンがあり、ここでも PRODEFI 研修で得た知識がそのまま表現されている。第三に、不法伐採への警鐘である。劇中では、不法伐採をして捕まえられたパビランと森林官のやりとり以下のようなものがある。

森林官：森林破壊はお前の仕業だったんだな。

パビラン：そうです。でも、これまでの7年間、個人に帰属する木なんてないと思っていたんです。それに規制があるなんて知らなかったんです。

森林官：実際に木の効用を知っているか？

パビラン：いいえ、全く知りません。木は単に薪になるためにあると思っていました。

森林官：木は粘土質の土を肥沃にするのに役立っている。これは、土壌浸食や早魃を防ぐことになるんだ。

1997年に森林法が改定され、植林を行った者が伐採権も得られるようになった。パビランの台詞にあるように、個人に属する木の存在を知らない住民もいると考えられる。そして、このメッセージを強めているのが不法伐採者に対する刑罰である。劇中では、パビランに対して禁錮1ヶ月と30万フランセーファの罰金が科せられる。劇中で言い渡される場面では、あまりの刑罰の重さに観客は騒がしくなったが、不法伐採という事の重大さを伝える方法としてはわかりやすい。法律の改定から10年経過してはいるものの、あらためて住民に警鐘を鳴らしているのである。

次に、住民の認識と考えられるものは大別して以下の2点である。第一に、資源を持つ者に機会が与えられるという認識である。これは、劇中の設定から読み取ることができよう。植林をするのは労働力や広大な土地（借りているのか持っているのか詳細は不明）を持っている村長一家である。他方、不法伐採をする家族は明日の食糧にも困っており、不法伐採して木を売り炭を焼

7) 「カウンターパート：我が国が開発途上国において実施している専門家派遣、技術協力プロジェクトおよびそのほかの国際協力事業において、技術移転や政策アドバイスの対象となる相手国行政官や技術者を指す。」(国際協力機構国際協力用語集 <http://www.jics.or.jp/soshiki/dictionary/k.html> 2009年4月5日アクセス)

いて販売している貧困一家である。極端な設定は喜劇を盛り上げるためかもしれないが、植林において成功するには資源を持たなければならない、資源を持つ者は成功すると受け止めているとも考えられる。

また、木を切る家族に課せられた罰金の30万フランセーファを巡って、木を植える家族と木を切る家族の善悪が逆転して描かれているのは興味深いところである。劇中では森林官とパブナイスが30万フランセーファを半分ずつ手にすることとなった。森林官とパブナイスが刑罰の重さや折半の額を相談するシーンは、隅のほうで声を潜めながらパブナイスが熱心に森林官に交渉する裏取引のような演技によって表現されている。仮に、この30万フランセーファの折半が、怒り狂う被害者に対する賠償という性質が強いのであれば、このようなシーンを設定するのは不自然であろう。さらに、パピランが刑務所に入れられたことを知った木を切る家族は、この一連の事件をパブナイスの嫌がらせだと捉える。食糧が僅かしか残っていない貧しい自分たちに、更に追い討ちをかけるようなことをしても少しも恥じる様子のない要注意人物だと話している。そして、釈放されて木を切る家族のもとへ戻ってきたパピランは「友人が罰金を支払ってくれたため釈放された」と語っている。30万フランセーファは農民にとって大金であることから、おそらく数人の友人が協力して支払ったということになるであろう。拘束されていた期間は明らかではないが、友人たちは短期間にパピランのための30万フランセーファを工面したということになる。不法伐採で捕らえられた身ではあるが、周囲の信頼が厚い人物であることが窺える。

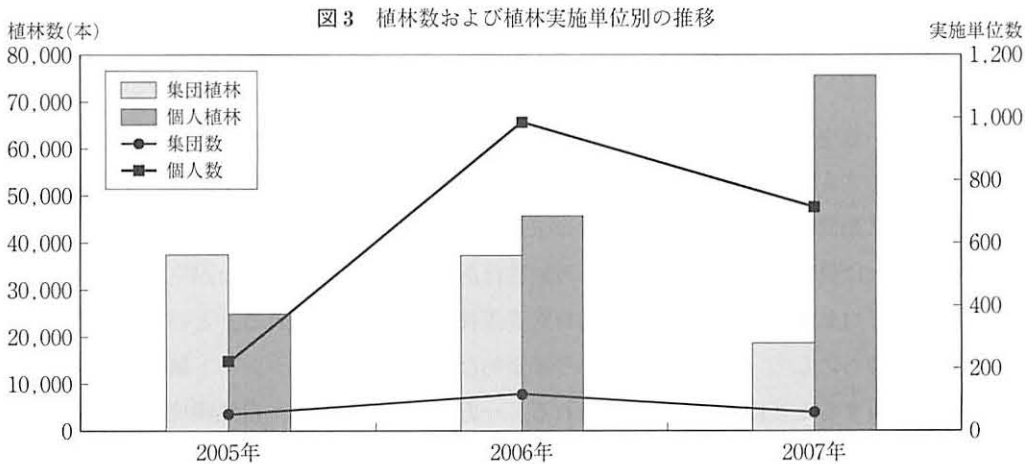
第二に、植林に経済的なインセンティブを見出しており、環境保全の視点よりも、家計戦略（現金収入に直結する）の視点でとらえていると考えられる。不法伐採の家族の父親が森林官の「なぜ自分が植えていない木を伐採したのか？」という質問に、「家族が食べるお米がなかった」「妻が金に困っていた」と答えている。一方、村長は植林した木の売買で交渉成立し、多額の現金を得ることができて大喜びする。その現金の使い道として、テレビの購入や、今のところは妻には内緒にしておいて近いうちに2人目の妻を持つことなどを考えている。このような劇のストーリーから、植林に経済的なインセンティブを見出しており、環境保全の視点よりも、現金収入に直結する家計戦略という視点でとらえていると考えられる。少なくとも劇団員たちはそうした認識のもとストーリーを創作したのであろう。

このように、オフィシャルなメッセージの他に、住民の認識が表現されていると考えられる設定が存在する。このような認識はどのような背景に基づくものであるのか次節で検討する。

3. 住民の認識とプロジェクト

前節で取り上げた住民の認識に関して、PRODEFI のファイナルレポートおよびユーザーズマニュアルから、PRODEFI 対象村における植林に関する興味深いデータを示したい。図3は、個人レベルでの植林と集団レベルでの植林の実施数および実施した植林の本数の推移を示したものである。棒グラフは植林した木の本数であり、折れ線グラフは実施単位数を示している。植林のやり方には、ASC や女性グループなどのグループ単位（集団植林）と、1個人や家族単位

(個人植林)で実施する場合がある。図3を見ると、個人活動が増えており、集団の活動が減っていることがわかる。また、個人による植林数と、1人当たりの植林本数が増加していることがわかる。2007年は前年比263人減少し、716人が個人植林を実施しているが、これはプロジェクト対象地区の全人口10,583人⁸⁾(子供も含まれていると考えられる)の6.7%の人々にすぎない。つまり、2007年にはわずか6.7%の人々(個人植林)が、1人当たり105本の植林をしたという計算になる。



(出所) セネガル国総合村落林業開発計画延長フェーズ (PRODEFI) ファイナルレポート (2008) P. 24 およびユーザーズマニュアル (2008) P. 35 より著者作成。

これらの個人の属性は不明であるが、PRODEFI のユーザーズマニュアルにも明記されているように、植林は支出と収入に時間差がある。この地域の主な植林樹であるユーカリの場合、5年で販売に至ると考えられている。投資してから回収に至るまでに数年待たねばならないのである。これを実践できるのは、労働力や土地や資金などの資源を確保できる者に限られていると言えるであろう。ちなみに、ファイナルレポートによると、2006年以降の対象村21村におけるユーカリの販売で、個人販売の一人当たりの平均収入は、2.3万フランセーファ (約5千円) であるが、30万フランセーファ (約6万円) 売上げた者もいるという。このように、一部の個人が木材販売によって多額の現金収入を得ていることが報告されている。

次に、住民が植林を環境保全の視点よりも家計戦略の視点で捉えていると考えられるが、これはプロジェクト側の意図するものとは少し異なるものであろう。ユーザーズマニュアル (2008) では、以下の項目が植林における「住民の声に聞くインパクト」として紹介されている。

- ・薪の調達のために費やす時間や労力が減少した。
- ・薬としてユーカリの葉を使用できる。
- ・野うさぎ、猿、イボイノシシなどの野生動物が再び観察されるようになった。

8) ユーザーズマニュアル (2008) データブック p. 1

- 植林地やその周辺では塩害や土壌浸食が減少し、裸地化していた植林地と畑の間の土地に再び草が生えだした。
- 植林地周辺の土壌が肥沃になった。
- 植林により風の速度が落ち、風が運ぶ塩、砂、埃、熱の量が減少した。その結果、バオ・ボロンの塩が畑に運ばれず、畑の塩害が著しく減少し、地力が回復した。
- 以前は穂をつけ頭が重くなったミレットが風で多く倒れたが、植林による防風効果で倒伏率が下がった。

（出所） ユーザーズマニュアルデータブック p.7 より抜粋

掲載されている全7項目のうち、一つ目の薪集めの時間と労働力の減少という項目以外は、何れも植林によってもたらされる自然環境上のインパクトを採り上げたものである。プロジェクトの延長フェーズ期間中に植林したユーカリは未だ販売に至っていないという背景があり、数年後に再調査をすれば異なる意見が紹介される可能性はあるであろう。しかしながら、プロジェクトの上位目標が「対象地域住民により持続的自然資源管理活動が実行される」というものである以上、住民が心待ちにしている現金収入という経済的なメリットをプロジェクト側がモデルの特徴としてアピールすることは難しいと考えられる。一方、民衆演劇では、自然環境上のインパクトを紹介したのは「木は旱魃を防ぐ」、「土壌保全に役立つ」というものに限定されている。そのうえ、そのような内容に触れているのは、植林の作業中に植林の動機付けとして語られている台詞2ヶ所と森林官が木の効用について説明している1ヶ所の計3ヶ所のみである。劇中で住民が実際に感じている植林のインパクトとして紹介されているのは、現金収入という経済的なメリットであると言えよう。すなわち、植林活動への参加が現金収入を目的とした「手段としての参加」と受け止めていると考えられる。

5. 結論と残された課題

劇中では PRODEFI への感謝が示されるだけでなく、PRODEFI 研修を忠実に再現した植林方法や植林の意義の説明がなされている。そして、今回の民衆演劇を観た者が PRODEFI 研修を受けていなくてもよく理解し記憶していることが確認できた。また、不法伐採については、10年前の森林法改定を知らない人々が存在すると想定し、警鐘を鳴らしたと考えられる。一方、住民たちの認識として、植林は富裕な者に機会を与えている活動として描かれている。実際に、プロジェクト対象村において、少数の個人植林の割合が増えていることが背景にあると考えられる。また、不法伐採者の刑罰を決めるシーンでは、木を植える家族と木を切る家族の善悪の設定が全く逆になっているのは興味深いところである。そして、住民にとっての植林活動は、現金収入のための活動とみなされており、セネガル政府の要請や、日本政府及び PRODEFI の目的の一つである環境保全にはあまり関心がないと言えよう。

今回の民衆演劇のメッセージを PRODEFI の改善に生かすため、以下を実施することが望ましい。第一に、植林と社会的公正および格差についての調査をおこなうことである。たとえば、先に述べたように、個人植林をしている者の属性を調べることも有効であろう。そして第二に、植林の中心的担い手がこの劇の村長のように富める者なのであれば、社会的公正のために貧困者への支援措置を導入すべきである。また、住民への環境保全の啓蒙を強めるとともに、植林への経済インセンティブが強まるような措置をとることが必要ではないであろうか。なお、その実施方法等に関する研究は今後の課題としたい。

また、本稿は民衆演劇を創作した住民たちの認識を分析するにとどまっており、民衆演劇を観劇した住民たちの反応を分析するには至っていない。観劇者が創作者とどの程度思考枠組みを共有しているのか興味深いところであり、今後の課題としたい。

参 考 文 献

- アイ・シー・ネット株式会社 (2008), セネガル国総合村落林業開発計画延長フェーズ (PRODEFI) ファイナルレポート
- アイ・シー・ネット株式会社 (2008), セネガル国総合村落林業開発計画延長フェーズ PRODEFI モデル ユーザーズマニュアル～住民による村落林業を促進する手引き～
- アイ・シー・ネット株式会社 (2005), PRODEFI セネガル国総合村落林業開発計画延長フェーズプロセスレポート(1)
- 柿沼秀雄 (1983) 「アフリカの民衆教育演劇：ナイジェリア、ザンビア、ボツワナを訪ねて」『人文学報・教育学』Vol. 18. pp. 1-27, 東京都立大学人文学部編／東京都立大学人文学部／首都大学東京
- 佐藤 寛編 (2003) 『参加型開発の再検討』アジア経済研究所
- 佐藤 寛 (2005) 『開発援助の社会学』世界思想社
- チェンバース, ロバート著 (2000) 『参加型開発と国際協力』明石書店
- 外務省ホームページ (2008年12月7日アクセス) http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/senegal/sect03_01_0501.html
- 国際協力機構国際協力用語集 (2009年4月5日アクセス) <http://www.jics.or.jp/soshiki/dictionary/k.html>

* 本稿は、日本アフリカ学会第45回学術大会にて報告したものを修正したものである。筆者が JICA セネガル事務所にてインターンとしてお世話になった際に執筆した「PRODEFI 研修をテーマとした民衆劇に関する調査」をベースとして研究を進めてきた。JICA, PRODEFI 関係者、そして民衆演劇にかかわる住民たちの協力を得て実現したものであり、深い謝意を表明したい。

(受付 2008年11月28日)